

巻頭言

阪神・淡路大震災から15年を迎えて

(財)神戸国際協力交流センター顧問・元 神戸市長

笹山 幸俊

阪神・淡路大震災から、15年が経過しました。言葉に言い尽くせない壊滅的な被害を受けた神戸市は、市民の方々の努力と、日本全国や世界中の方々からの多くの励ましと支援を受けて、なんとか復興を成し遂げることができました。

この15年の節目を迎えるにあたり、この間の足跡を振り返ってみたいと思います。

1. 当初の復興への見通し

大震災の当日は、自宅も家具が散乱し、家内が転倒して飛んできたテレビで顔を負傷するというような状態でしたが、とりあえず、市役所に行こうと準備をすぐにしておりました。家を出ようとしたところ、当時の、山下助役（故人）が、免許取りたてでしたが、自分で車を運転して来てくれましたので、その車で市役所まで行きました。途中、市内の被害を自分の目で見ながら午前6時40分ころには市役所に到着しました。まだ、庁内は守衛がいるだけでしたが、その後、何人かの幹部も到着し、いくつかの指示をしました。

そのときから神戸市の復興についても、委員会方式により検討を進めることを基本にした大まかな方向を考えていました。そしてその時に思っていたのは、3年、5年、10年という段階での復興の進ちよくでした。すなわち、当初の3年で、なんとかインフラの復旧や、当面の住む場所の確保などを図る、5年でまちの計画が定まり、10年で復興がほぼ完了するという見通しです。結果的には、だいたい、このように進んだと考えています。

2. 過去の経験が判断力の源泉となった

あの壊滅的なまちの状態の中でも、このように冷静に考えられたのは、やはり過去の経験があったからではないかと思っています。私は、昭和21年3月に、神戸市に採用され、当時の戦災復興本部で戦災復興の仕事をしました。焼け野原となったまちを測量して歩いたりしました。また、昭和42年の大水害でも、甚大な被害を受けた市街地の復興に取り組みました。そして、いろいろな地域でまちづくりにかかわってきました。そのような経験が、災害からの復興を考える大きな力になったと思います。

3. まち中を歩いて見て回る

市長をやめてから2年間ほど、東灘区から垂水区までの市街地を自分の足ですべて歩いてみました。震災からちょうど7年目から8年目あたりのことです。まちづくりの計画がはっきりと姿を見せてきている時期でした。多くのところでは、市民のまちづくりの苦勞がはっきりと成果として現れてきていました。また、歩いて見てよくわかるのは、以前に苦勞をして作ったオープンスペースが、やはりまちの骨格に重要な役割を果たしているということでした。それに、古くからまちの核となっていた神社仏閣を中心としたまちの構造の重要性もよくわかりました。過去の市民の努力や、まちの歴史をよく知ることが、まちを考える上で極めて重要であることを改めて実感しました。

4. 市民の努力に敬意

今、15年経ってまちがこのように復興できたのは、やはり、まちの方々の努力によるものと思います。本当に大変な努力をされてこのようになったのだとよくわかります。一方、あまりうまくいっていないところもあるのは事実です。そのようなところは、まちとしての合意がとれなかったわけですが、そういう意味で、まちづくりにおける合意形成の地道な努力というのがいかに大切か、ということをまちそのものが物語っているように思います。

5. 将来に向けて

阪神・淡路大震災は、自分としてはまったく予測できませんでした。当時は、もし、活断層が動くとしても山の方が危険で、扇状地の低い部分は比較的安全だと思っていました。しかし、結果的には、そのような判断は見事に裏切られました。倒れた阪神高速の橋脚は、建設当時はドイツの最新技術としてもてはやされたものでした。しかし、結果はご承知の通りです。やはり、「人間」は、「自然」には負けるものだ、と覚悟しておく必要があるでしょう。「自然」には負けても、なんとか命が助かるように、住宅も建築物も土木構造物も考えておくことが、せめてもの対策です。これを最近では減災と言っているようです。

実は、私の勤務している国際協力交流センターの部屋からは六甲山が非常によく見渡せます。最近、気になっているのは、六甲山の山裾と扇状地との境界付近です。大震災の後、少し、形状が変化しているように見えます。非常に微妙な変化なので、防災を一緒に研究しているメンバーにも言うのですが、なかなかわからないようです。自分をとりまく自然、自分のまちをよく知ることが、減災の基本となるのではないかと思います。

阪神・淡路大震災の経験をした我々は、行政も、市民も一緒になって、自分たちのまちのことをよく知って、まちの安全を高めていってもらいたいと願っております。